

## ハーディの「霸王ら」における 〈精霊〉の意義

小山浩代

### (1)

Harold Orel が、彼の著書 *Thomas Hardy's Epic-Drama* の第二章<sup>1)</sup>，“Hardy and the Universe” を書くにあたって、この章は “Hardy and God” としてもよかったのであるが、ハーディは、すでに、神が宇宙を司る力として働くとは、考えられなくなっていたので、このようなタイトルを付けると語っているのは、この「霸王ら」の主題を読みとる上で注意すべきことであろう。小説、詩の次に、どうしてもこのような epic-drama という文学様式で表わさざるをえなかったハーディの創作意図、更にその内奥にひそむ彼の精神の働きを探り、英文学史上の彼の位置、そして二十世紀文学に先がけて彼の作品が持つ意義を考察してみたいと思う。

小説において、個々の人間対人間、人間対社会・自然をストイックな直観と観察力で描きつけたハーディは、さらに人類の歴史・宇宙と人間という根源的なテーマを文学の中の、しかも「叙事史劇」で表現するという構想を、すでに *Jude* 出版 (1896年) の20年前に立てており、1870年頃からは、正確な歴史上の資料収集、古戦場の実地調査など、着々と準備をすすめていた。作品は、ナポレオン戦争の1805年から1815年までの史実を素材にして、epic-drama として創作、第一部は1904年 (1903年版も残っている)<sup>2)</sup>、第二部は1906年、第三部は1908年にそれぞれ出版され、三部19幕<sup>3)</sup>131場から構成されThe New Wessex 版で707頁におよぶ大作である。

1874年3月13日、「ヨーロッパ」を舞台にすることを書き記し、「1789年か<sup>4)</sup>

ら1819年までのヨーロッパのイリアス』という構想<sup>5)</sup>を立てていた。そして1903年初版の序には、The Great Historical Calamity, or Clash of Peoplesと要約している。登場人物は、ナポレオン、ピット、ネルソン、ジョージ三世、ヴィルヌーブ、アレクサンドル、軍人、政治家、兵士、市民、農民、群衆等、せりふを与えられているものだけで百数十名にわたり、しかも、人物の心理・性格描写、筋の展開といった、作品に要求される読物としての魅力は容易に読者に伝わるという性質のものでなく、かたよった評価しか得られなかった理由も十分おしはかることができる。

作者は、ナポレオンを主役に、皇帝という運命をもった人間が、いわゆる盲目の Immanent Will (内在意志) によって、栄光から敗北においやられる歴史的状況を、散文、無韻詩、押韻詩等使いわけて、即事的に書き綴った叙事史劇であるが、単に決定論的世界観の研究対象としてあつかうのは注意すべきである<sup>6)</sup>。しかし、全くそのような思想的背景を無視した読み方もさけるべきであろう。

構想を練り始めてから作品完成までの30年以上、作者を捉えていたテーマを探り出してゆく場合、度々論じられてきたことではあるが、十九世紀後半の新しい科学思想の他に、トマス・ハックスレイ (1825-95)、ハーバート・スペンサー (1820-1903)、アーノルド (1822-88) 等の影響を考えないわけにはゆかない。彼等は、キリスト教信仰を全く失ってしまったのではなく、誠実であるがゆえに、苦悩と痛みの中で懷疑しつづけたのであった。ハーディにとって、この人間界におけるさまざまな悪・人間の悲劇・不幸を生み出す源を、旧約の時代から、ギリシャ・ローマの古典世界にさかのぼり求めており、1885年12月31日には、Marcus Aurelius から、

This is the chief thing: Be not perturbed; for all the things are according to the nature of the universal.<sup>7)</sup>

を引用して書きとめている。宇宙の掟としてハーディが認めざるをえなかった一つの法則、言い換えれば、彼の悲劇的世界の根源は、盲目的に人間を操る運命であった。若くして人格神としての神への信仰に疑いをいだき

始めていたハーディは“God”という表現をむしろ意識的に用いなかったとさえ考えられるが小説を通して考察した場合も含め、主題の中心は結局神についての問いかけであったと言えよう。<sup>8)</sup>

十九世紀末におかれたハーディにとって、この問題はあきらかに、二十世紀の悲劇的世界観に見られる葛藤・反抗・死の無意味さを招く神喪失の意識とは、異質のものであったと考えられる。この「霸王ら」において、表現は多様であるが、宇宙を支配する法則と考えられるものは、現象として観察する限り、人類の苦悩・矛盾・非情さ・不正の源となるのは「意志」Will である。この「意志」は作品中、“Spirit”〈精霊〉たちの言葉やコーラス、又はセミコーラスを通して擬人化されて表現される。この〈精霊〉たちに関する解釈・鑑賞にのみかたよった考察は避けるべきであろうが、小説という文学様式では書きつくせなかったハーディの宇宙観・世界観を理解するためには、第一に注目すべき論点であると思われ、その意味でこれから読み解いてゆくことにしたい。

一般的にこの作者を determinist 或は, pessimist であると断定してしまうならば、このような作品を完成させるまで作者を鼓舞し続けた motif は何であったかと推しはかると疑問が残るように思われる。ナポレオン一人の人間から、人類全体の運命へと、視点を拡げて表わされた意図・歴史観は、単なる悲観論ではなく、まして、安易に optimistic と論じ切ることもできないと思う。<sup>9)</sup> 決定論的宇宙観をあらわすとしても、ハーディが、キリスト教を支柱とする道徳的価値観を全く否定するに至ったとは認められないし、それは作者自身の生涯においても執拗にさいなまれていた深刻な問題となつてつねにゆれ動いていたはずである。従つて、「霸王ら」の〈精霊〉たちが、作者の思想や世界観、真理に対する洞察をどのように表わしているかをみることは、この作品のみならず、他の作品全体の理解にかかわってくると思われる。

作者は序文で“sources or channels of Causation” (p. 5) (因果律の源または経路) として〈精霊〉たちを登場させ、

“supernatural spectators of the terrestrial action, certain impersonated abstractions, or Intelligences, called Spirits” (p. 4)

の役割を演じさせることがふさわしいと述べている。年代記的なこの詩劇を读者がどのように想像力を働かせて一つの artistic unity として読みとるかは、この〈精霊〉たちの観察力や洞察力をどれ程深く、读者が、序文の言葉を借用すれば mental spectator となって、感じとるかで定まると言うこともできよう。作者自身くり返し語っているように、決して体系的哲学を持った思想家ではなく、作家として、その時々<sup>10)</sup>の impressions を表現しているということも注意すべきであろう。以下 the Spirit of the Years〈歳月の精〉、the Spirit of the Pities〈あわれみの精〉、the Spirit Sinister〈不吉の精〉、the Spirit Ironie〈皮肉の精〉、the Spirit of Rumour〈噂の精〉、the Shade of the Earth〈大地の霊〉、を詩劇構成上の意義、及びハーディの Immanent Will との関係のみてゆくことにする。

## (2)

〈歳月の精〉は前景で、

Our scope is but to register and watch

By means of this great gift accorded us— (p. 23)

「我々のつとめは、ただ記録し見守るのみ、我々に与えられたこの偉大な才能によって」とその役目をはっきり語る。例外はあるけれども、精霊たちは、直接に人間の行為に干渉することはなく、宇宙に遍在して全てを支配する「内在意志」と人間（登場人物）を結びつける経路の働きをする。〈大地の霊〉が、「内在意志とは、又、そのはかりごとはいかに」と問うのに対して、〈歳月の精〉は、

It works unconsciously, as heretofore,

Eternal artistries in Circumstance,

Whose patterns, wrought by rapt æthetic rote,

Seem in themselves Its single listless aim,

And not their consequence. (p. 21)

「意志は昔も今も変ることなく、無意識に、環境という織地に永遠の芸を織りなしている。無意識にひたすら織られたその織柄は、それ自体、意志の無関心さを示すだけで、結果など意に介さぬのである」と応えるが、この意志がいつか目覚めるにちがいないという〈あわれみの精〉に向って、

The Will has woven with an absent heed  
Since life first was; and ever will so weave. (p. 23)

「意志は、うつろに織り続けて来た、生命が最初に誕生してからこのかた、そしてこれからもつねに織り続けるであろう」とつけ加える。作中このような哲学的命題の発言が、〈歳月の精〉によくみられる。この「意志」の働きをナポレオンをとおして存分に滲透活躍させ、運命を操らせることに、徹底した手法をいかすため、このような〈精霊〉たちの設定は確かに欠かせなかったと思われる。「意志」の伝達者であると同時に、史実を知っているはずの読者に、戦況、事件、登場人物の死などについて予言的言葉を伝えることも多い。劇の中で、この予言的な声を聞いてしまった人物は、不安・危惧といった不吉な想いに我知らずおびえて、背後のある力によっていつのまにか破局に向うのをさけることが出来ない状況におちいる。第三部1幕1場、ロシア遠征に向ってニーメン川に進軍偵察中のナポレオンが落馬する場面、〈歳月の精〉は、ナポレオンに、

The portent is an ill one, Emperor;  
An ancient Roman would retire thereat! (p. 445)

「この前兆は不吉である。昔のローマ人なら退却するであろうに」とささやくと、

Whose voice was that, jarring upon my thought  
So insolently? (p. 445)

「誰の声だ。私の想いをかくも無礼にかき乱すのは」と不安にかられるのである。人はしばしば日常的な場面で経験する心理の一つとして容易に想像できる情景であると思われるが、人間は本来自由意志で判断し行動して

いるように思い、またそうありたいと願うにも拘らず、現実には、ますます不自由に、仮に運命と呼ぶような状況にかきたてられるという有様は、〈歳月の精〉の声を聞いた直後のナポレオンの言葉にはっきりあらわれている。

That which has worked will work?—Since Lodi Bridge/The force I  
then felt move me moves me on/Whether I will or no; and often-  
times/Against my better mind. . . . Why am I here?—By laws im-  
posed on me inexorably!/History makes use of me to weave her  
web/To her long while aforesaid mesh/And contemplated  
charactery: no more.

(III. 1.1. p. 449)

「今までわざわざしてきたあれが、またもやロディ橋以来、私を動かしていると感じられるあの力が、私の意志にかかわりなく、私の心を動かす。何故私は此処に来ているのか。しばしば私の判断に逆らってまでも。冷酷に負わせられている諸々の掟によってである。歴史は私を利用し、はたを織ろうとたくらんでいる。遠い昔から編まれていた模様のとおり、又、予め計画されたとおりの模様」に」とナポレオンに語らせているが、〈歳月の精〉の言葉と読むこともできる。その道が個人としての自分に如何に不吉に思われ、不都合と予感されても、皇帝の運命を背負ったナポレオンには、さけることが叶わなかったと解釈すればハーディの決定論的世界観の一側面である救いの無さ、人間個人の非力さを認めざるを得ないように思われる。

ネルソンが戦場で倒れた後、数時間苦痛とたたかって生命はたつ場面で、*Spirit of Pities* 〈あわれみの精〉が同情し「意志」の働きの不正を非難すると、〈歳月の精〉は、平然と戒め次のように語る。

Nay, blame not! For what judgment can ye blame?

.....

The cognizance ye mourn, Life's doom to feel,

If I report it meetly, came unmeant,

Emerging with blind gropes from impercipient

By listless sequence—luckless, tragic Chance,

In your more human tongue.

(I.V. 4, p. 147)

人間がものを感じとる働きを持たされているという運命は「意志」に何も意図などなく、不運な悲劇的偶然の冷酷な成りゆきで生じたにすぎないと言って〈あわれみの精〉の人間的な感じ方を無意味だと反論する。同じく、第一部最後の場面で、〈歳月の精〉は、

I only say to thee

Its slaves we are: Its slaves must over be!

(I. VI. 8, p. 195)

「言っておくが我々は、あれの奴隷であり、つねにその運命にある」と強く主張し、或は、

I have told thee that It works unwittingly,

As one possessed, not judging.

(III. VII. 8, p. 695)

と語る。人間の自由意志を全く認めようとしないう歳月は、ハーディ独自の克己主義を余すところなく表わしてはいるが、これが作者の思想の全てであるとは言えない。精霊同志の対話、問いかけの中で特に〈あわれみ〉が、ハーディの心を容易に解き放つことのなかった問題や桎梏を次第に和らげてゆくことに、読者はある救いを感じずであろう。

‘The Spirit of the Pities’

作者は序文においてこの〈あわれみの精〉について特に書き記している。

These phantasmal Intelligences are divided into groups, of which one only, that of the Pities, approximates to “the Universal Sympathy of human nature—the spectator idealized of the Greek Chorus; (p. 5)

「想像上の叡智の精霊たちは幾種類かに分類できるが、その中で〈あわれみの精〉のみがギリシャ劇のコーラスの理想化された観客、即ち、人間の普遍的共感をあらわすものに、もっとも近い」ものであり、他はむしろ、この役を引きたてるために登場していると述べており、「霸王ら」の詩劇構成要素のもっとも主要なものと考えられる。しかし作者は更に、

it is impressionable and inconsistent in its views, which sway hither and thither as wrought on by events. (p. 5)

と書き加え、この〈あわれみの精〉は、ものが見方が印象的で統一性に欠けていることを指摘している。J. O. Bailey が論じているように<sup>12)</sup>〈あわれみの精〉はある程度「因果律の源、又は経路」の働きを持っているが、必ずしも「意志」の伝言をそのままに伝えているとはいえない。〈あわれみの精〉は、苦悩や痛みを感じる事が出来、無意識な Process「歴史の流れ」に人間的な抵抗と反感をありのままに示し、この作品全体をとおして、他の精霊たち、さらに「意志」までも人間らしい慈愛に目覚めさせようとする。

例えば、激しい戦いの後、暑さに耐えかねて今迄敵同志であった両軍の兵士たちが、川におり、互いに手を握り合いながらのどをうるおす場面では、

What more could plead the wryness of the times

Than such unstudied piteous pantomimes! (II. IV. 5, p. 335)

「この期せずして起った痛ましいしぐさほどこの世の悪を訴えるものはあるまい」と歌い、人間のみならず動植物にまで心を動かす。春五月、平和な緑の村が間もなく激戦の場となる光景を前に、精霊たちがそれぞれに想像力を働かせている場面で、この〈あわれみの精〉は、

Wrecked are the ancient bridge, the green spring plot,

The blooming fruit-tree, the fair flower-knot! (II. VI. 4, p. 408)

と歎くが、ここにあらわれているのはハーディ自身の compassion と解釈することもできる。この深い compassion の想いは、人間の心の苦悩、運命、社会の矛盾・不正、宇宙の盲目的な意志の働きなどに向けられると、厳しい批判、問いかけの言葉になる。先にあげたネルソン戦死の場面で、倒れてすぐに息絶えていれば、あのように長く痛まずにすんだのにという〈あわれみの精〉のコーラスに〈歳月の精〉が、

Young Spirits, be not critical of That

Which was before, and shall be after you! (I. V. 4, p. 146)



「お前たちより前から存在し、お前たちのあとまで生き続ける〈あの方〉を非難するのはやめなさい」と戒めるが、その後〈あわれみの精〉のコーラスから、

Yea, yea, yea! / Thus would the Mover pay / The score each puppet  
owes, / The Reaper reap what his contrivance sows!

(I. V. 4, p. 147)

と、あくまで「意志」の責任を追求する声がひびくのである。皮肉をこめたこのような非難は、〈前景〉冒頭で、〈歳月の精〉が、「〈あれ〉はつねに無意識に働いている」と語るのに対して、次のように応えるせりふにも見出せる。

Why doth It so and so, and ever so, /

This viewless, voiceless Turner of the Wheel? (p. 22)

「何故〈あれ〉はつねにそんな働きをするのですか、目も見えず、声もきこえぬこの運命の車輪の〈廻し手〉は」と責める。栄光の座につくナポレオンをとがめて、彼はただの伝統踏襲の男となり、何も利益をもたらさないから、無きものとされた方がよいと主調すると、〈歳月の精〉は、

But old Laws operate yet; and phase and phase / Of men's dynastic  
and imperial moils / Shape on accustomed lines. Though, as for me, /  
I care not how they shape, or what they be. (p. 24)

今なお昔からの掟が働き、帝王たちの歴史はくり返されているがそれがどのようなものであろうと自分には問題ではないと答える。なおも、〈あわれみの精〉が、

You seem to have small sense of mercy, Sire? (p. 24)

「慈悲の心が足りないのではありませんか」と問いただすと、〈歳月の精〉は、

Mercy I view, not urge;—nor more than mark / What designate your  
titles Good and Ill. / 'Tis not in me to feel with, or against, / These  
flesh-hinged mannikins Its hand upwinds / (p. 24)

私は慈悲を観察するだけで、無理に人に強いたりはせぬし、注意もせぬ。機械仕掛けの人形にあわれみを感じたり腹を立てたりすることは、私のつとめではないと徹底した無関心な、観察者の性格を示し、〈前景〉のみならず全篇にわたり、〈歲月〉と〈あわれみ〉の対立が展開されてゆく。ハーディの作品につねに読みとれる矛盾交錯したわかりにくさが最後の大作にもこのような形であらわされているともいえる。作者自身否定したい衝動にかられながら、なおも長い生涯それと共に生き続けなければならなかった、人生への懐疑と絶望を考えた時、この「霸王ら」執筆に対する持続的な創作意欲の奥に、痛みと感ぜられるような、人間の諸々の営みへの執着を、読者は感じとるはずである。

地上界の年代記的戦争史劇の場面と、各精霊たちが、天上界 (the Overworld) から下界の人間たちの行動に「意志」の力が如何に働いているかを観察批判しあう場面を創りあげた意図の中に、作家としての自己の心情を客観的に熟視分析、できることなら平安と和らぎに至る一つの信条を結論にまで昇華させたいという念願がこめられていたのかもしれない。第二部及び〈後景〉で、〈あわれみの精〉は、意識を持たず、悪を知らぬ「意志」が目覚めることを期待して歌う。

Yet it may wake and understand/Ere Earth unshape, know all things,  
and/With knowledge use a painless hand,/A painless hand!

(II. VI. 7, p. 437)

「それでも〈あれ〉は、目覚めて、地球が破滅せぬうちに全てを知り理解するようになるでしょう。知恵を以て、痛みを与えぬ手を用いるようになるでしょう」と。〈後景〉では、セミコーラスの音が、

Should It never/Curb or cure/Aught whatever/Those endure/Whom  
It quickens, let them darkle to extinction swift and sure. (p. 706)

「意志」のままに生かされている人間の苦悩をその「意志」がいやしてくれないならば、人間たちをすぐさま暗闇に消えさせた方がよいと、はげしく訴え、この作品は〈あわれみの精〉の次のコーラスで幕を閉じる。

But—a stirring thrills the air/Like to sounds of joyance there/That  
the rages/Of the ages/Shall be cancelled, and deliverance offered  
from the darts that were,/Consciousness the Will informing, till  
It fashion all things fair! (p. 707)

太古からの自然の猛威は消え、人類の悪に救いがもたらされ、意志は意識に目覚め、全てが美しくおりなされるであろうと。

1907年 Edward Wright に宛てた手紙でハーディは meliorism 「改義主義」が、「宇宙意志」にとって代わるであろう、そして、「意志」は究極的には目覚め人間に sympathetic になるであろうと語り、しかもこれは、ハーディ自身の考えで他の作家思想家たちとは関わりないと主張しているが先に引用したコーラスの声を作者の最終的な結論と判断してよいかどうか。1914年第一次大戦中、彼は妻に、この激しい戦争を予測していたならば、「霸王ら」をこのような結末とはしなかったであろうと語っている<sup>13)</sup>。このコーラスの希望にみちた言葉は、作者が自然界人間界にいただいた願望である。そして「意志」の覚醒とは、単に厳然たる宇宙の法則である「意志」の覚醒ではなく、人間の心の覚醒をも作者は念願していると考えたい。同時に読者一人一人のそれをも意味していると言えないであろうか。Susan Dean が、

“—if consciousness is awakened in the mind of the reader—if he comes to share the Pities’s urgent sensitivity to the world’s need for conscious sympathy and ‘fairness’—then the mental universe is itself a little more awake, and evolutionary meliorism is not only a future possibility but, in one small instance, a present accomplishment.”<sup>14)</sup>

と述べているのは適切な解釈と考えられる。更に同年代に書かれている詩等を比較して考察しなければならないが、創作過程の思いつきでこのように作品を結んだとは思われない。無意識な意志の力によって人間が弄ばれているとしても、ハーディが示す人間への “loving kindness”(p. 706) は、そのような無意識な宇宙の働きよりも人間をより崇高な存在に高めること

が出来るといふ確信を読者に与えるのではないだろうか。作者が世界大戦に失望し、自らこの作品に反省の言葉を発したにしても、余り重要視すべきことではない。人類がくり返してきたまさに人間本性が負った宿命ともいえる戦いの歴史をふりかえれば、人間はつねにそのような落胆と新たな決意を経験して来たのであるから。

‘The Spirit Ironic’

この〈皮肉の精〉は、〈あわれみの精〉と相対立する性格と役割を演ずる。非論理的な点をすばやく感知し、地上人間界で展開される悲劇的光景を知的に冷笑するが、The Spirit Sinister〈邪悪の精〉よりは、〈あわれみ〉〈歲月〉に近い関係にある。アウステルリッツの戦場、フランス軍陣地でロシア軍退却の後、〈歲月〉が内在意志の働きによって人間が逃げまどう透視図を見せた後、〈皮肉の精〉のコーラスは〈歲月〉に似て、決定論をそのまま歌っているように思われる。

O Innocents, can ye forget/That things to be were shaped and set/  
Ere mortals and this planet met? (I. VI. 3, p. 172)

「無邪気な者たちよ（〈あわれみの精〉への呼びかけ）、忘れてはならぬ。今あらわれようとするのは、この地球に人類があらわれる前からすでに定められていたということ。」またウルムにおけるオーストリア軍の敗北について、

And yet, my friend,/The Will Itself might smile at this collaps/Of  
Austria's men-at-arms, so drolly done; (I. IV. 5, p. 117)

と「意志」そのものを揶揄したり、第三部フランス軍がワーテルローで敗れる場面、〈あわれみの精〉が「これが死すべき人間たちの最後の場であろうか」と問うのに答えて、

Warfare mere,/Plied by the Managed for the Managers;/To wit: by  
frenzierd folks who profit nought/For those who profit all!

(III. VII. 8, 693)

「ただのいくさにすぎないのさ、支配者に操られる者どもがむきになって

さ、利を思いのままにする者のために、何ら益するところのない半狂乱の民たちの」と批判する。このように〈皮肉の精〉は人間界の愚かしくみえる不合理な現実、社会への疑いを鋭く批判し、一方では「意志」の非情さを肯定する冷徹さもそなえている。

‘The Spirit Sinister’

〈邪悪の精〉は〈前景〉で〈歳月の精〉が、「意志」の無自覚な反省のみえぬ支配を非難すると、

Good, as before./My little engins, then will still have play. (p. 22)

「これで私の小さなたくらみもさらに働き場所を持つというわけだ」とこれから始まる劇の最高の指揮者ともいえる「意志」の働きに同調するのである。この「意志」をめぐる〈歳月〉と〈あわれみ〉の対話の中で、人間はつねに「意志」の支配のもとにいるという〈歳月〉をうけ、「みなくあれ」の手足か。姿をかえてはいるが、みなくあれの手下だとすれば人間どもがおそろしくなる」(p. 25)とハーディの悲観的な人間観をも示している。しかし他の場面では、悪をたたえたり、世俗的な冷笑を試みたりする。

For if my casual scorn, Father Years, should set thee trying to prove  
that there is any right or reason in the Universe, thou wilt not accomplish it by Doomsday!  
(I. I. 6, p. 62)

宇宙に仮に正義や理性があることを証明しようと試みても、この世の最後の日までかかっても、それはとてもできないことであろうと最も十九世紀末的な諷刺をきかせたり、作者が、「意志」の性格の中で絶対に認めたくないと思っている無自覚性を時に軽妙に批判する。〈前景〉と第一部に目立つ程度で〈歳月〉や〈あわれみ〉と比較すると登場場面はかなり少い。

‘The Spirit of Rumour’

〈噂の精〉は人間界の出来事を伝え広めたり、人間の姿をして、人に話しかけたり、予言の働きを持つ。パリのチュイルリー宮殿通りで〈歳月〉の命令をうけて、若い外国人に姿をかえ街に現われて、ナポレオンはあの海では決して夢を実現することも、王となって君臨することもないだろう

と失却を予言し (I. VI. 7, p. 189), ロンドンではナポレオンが王位につくべくミラノに向っているというような噂を、やはり人間の姿をして、伝えたりするが、他の精霊たちと議論しあう場面は殆どなく、劇で果す役は明確でない。

‘The Shade of the Earth’

この〈大地の霊〉が、

What of the Immanent Will and Its designs? (p. 21)

と〈歲月〉にたずねて、この劇は幕が開くのであるが、登場回数、各精霊たちの中で最も少い。ナポレオンのイギリス侵略を伝える手紙をめぐる、「どんな役に立つというのであろうか、この王国を亡ぼし、彼の地に王国をたて、あえぐ民を苦悩においやり……」「そんなあきあきするからくりは、人間の世界など創らなければ避けられるであろうに」

When all such tedious conjuring could be shunned / By uncreation?

(I. I. 2, p. 38)

と〈歲月〉に問いかけたり、人間はあやつり人形であるにもかかわらずさまざまな感情をいただくように運命づけられているのは理不尽ではないかなどと人間への同情をも示す。

(3)

以上、引用文を中心に各精霊たちの主調、役割を対比してきたが、ハーディ研究家たちが指摘しているように、何れかの精霊のみが作者を代弁しているのではなく、そこにみられる意見の対立や同調は、作者が問い求め続けた生きることの意味、また心の平安への希いを、妥協することなくいかに宇宙の掟の中で探し正当化できるかをあらわしている。1907年、E. Wright にあてて、この作品のテーマは「Free Will 対 Necessity の問題を解決することのように思われます。人間の意志は完全に自由であるわけでもなくまた不自由であるともいえませ<sup>15)</sup>ん。」と書いているが、これは彼の小説にも共通して認められる主題である。宇宙の法則を無目的な、人間に全く無

関心な力の法則として認めることしか出来なかったとすれば、人間はただその支配のもとで反抗と苦悩をくり返すか、忍従と諦観の生き方を容認するほかないと考え、このような作品を創作する意味もなかったであろう。人生の諸相を凝視し、小説・詩に綴る、長い人生を支えていた作者の信条は「意志」の無意識な性格が決して本来のあるべき姿ではなく、人間に自由を与える摂理が働くべきであるという確信であったと思われる。〈後景〉で〈あわれみの精〉が、「意志」の盲目があかぬことはない、意識が目覚め、改善のために直ちにとりかからぬはずはない (p. 706) と歌ういわゆる改善主義とよばれるものは、あくまで作者の願いである。ハーディがペシミストであったか、改善主義者であったかの問題ではなく、彼は本来そうあってはならないと感じとった人間のさまざまな相が、あるべき状態をとりもどすことを真剣に念じていたと考えるべきである。天上界の精霊たちには「意志」による愚かしい無用の戦いの情景も、実は科学文明の時代において人間が未だ征服しかねている自らの心の不自由が招く試練の場とみることできる。これを絶望のしるしとせず最悪の場に耐えそれを超える道筋を作者はすでに見出していたはずである。1890年、‘Altruism, or The Golden Rule, or whatever ‘Love your Neighbor as Yourself’ may be called, will ultimately be brought about I think by the pain we see in others reacting on ourselves, as if we and they were a part of one body.’<sup>16)</sup>と書き記している中に人間自らの覚醒の真理を我々は見出すことができるが、ハーディにとってその実現は現実の世界からみると、絶望的にうつつにちがいない。彼の歴史観も結局は人間への compassion を基調としていることをこの作品からはっきり読みとることができるのである。

#### 注

- 1) Harold Orel, *Thomas Hardy's Epic-Drama; A Study of The Dynasts*, (Greenwood Press), 1963, p. 19.
- 2) 出版年代については、Richard L. Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (Oxford Univ. Press), 1954, 及び Walter F. Wright, *The Shaping of*

*the Dynasts: A Study in Thomas Hardy*, (Univ. of Nebraska), 1967, p. 1.  
参照。

- 3) ハーディは130場と数え、*An Epic-Drama of The War with Napoleon, in Three Parts, Nineteen Acts, and One Hundred and Thirty Scenes* と副題をつけているが、実際は Fore Scene〈前景〉, After Scene〈後景〉を加えると133場。  
The New Wessex Edition, (Macmillan), 1978 をここでは用いる。
- 4) *The Dynasts*, p. xi.
- 5) *ibid.*, p. xii.
- 6) W. F. Wright, p. 36.
- 7) Florence Emily Hardy, *The Early Life of Thomas Hardy*, 1928, p. 231.
- 8) *ibid.*, p. 293.
- 9) Susan Dean, *Hardy's Poetic Vision in the Dynasts*, (Princeton Univ. Press), 1977, pp. 32-33.
- 10) Thomas Hardy, *Hardy's Personal Writing*, ed. by Harold Orel (Univ. of Kansas Press) 1966, p. 49.
- 11) S. Dean, pp. 12-13.
- 12) J. O. Bailey, *Thomas Hardy and the Cosmic Mind*, (Greenwood Press), 1956, p. 54.
- 13) S. Dean, p. 34.
- 14) *ibid.*, p. 34.
- 15) F. E. Hardy, *The Later Years of Thomas Hardy*, p. 125.
- 16) F. E. Hardy, *The Early Life*, p. 294.